

平成 22 年 6 月 29 日現在

研究種目：基盤研究(A)
研究期間：2007～2009
課題番号：19202003
研究課題名（和文）インド宗教思想の多元的共存と寛容思想の解明
研究課題名（英文）Investigation of religious pluralism and the concept of tolerance in India

研究代表者
釈 悟震（SHAKU GOSHIN）
財団法人東方研究会・研究員
研究者番号：80270536

研究成果の概要（和文）：

仏教を含む多様なインドの宗教・哲学のテキストや図像、ないし宗教事情から、「寛容」概念や「寛容的」態度を、文献実証的、哲学的、歴史的、あるいは実地調査的に読み取り、解明する共同研究を遂行した結果として、西洋的な tolerance の概念とは異なるインド的色彩の濃い、「寛容」概念の諸類型が浮かび上がった。とりわけ雑多な要素を取り込もうとする「包括主義」は、異文化共生を我流的ではあるが平和的に実現する現実的な一手段として見直すべき、との結論に至った。

研究成果の概要（英文）：

This research project has made an attempt to clarify the concept of tolerance in the religious pluralism of India and related areas, pursued by the project team which consists of nearly twenty scholars of various fields of specialization who have approached the research topic by studying relevant texts or iconographic materials of various systems of Indian philosophy and religion including Buddhism, or by making relevant field works in various areas of India or other countries, with research methods ranging from philological, historical, philosophical to anthropological ones. As a result, a new light has been shed on the difference between the Western concept of tolerance and various forms of Indian tolerance. Specifically it seems very important to re-evaluate the significance of Indian 'inclusivism' in the contemporary global societies because it can be regarded as a practical solution to multi-religious tension of today, with a friendly relationship with other religions retained by integrating them into its own doctrinal framework, with a potential degree of conflict lessened by a self-centered adoption of others.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	6,000,000	1,800,000	7,800,000
2008年度	6,000,000	1,800,000	7,800,000
2009年度	3,100,000	930,000	4,030,000
年度			
年度			
総計	15,100,000	4,530,000	19,630,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：寛容思想 比較思想 平和思想 インド思想 インド的包括思想 諸宗教共存

1. 研究開始当初の背景

本プロジェクトは、財団法人東方研究会理事長であり、東京大学名誉教授である前田専學博士が平成 14-16 年にかけて研究代表者として行った「中世インドの学際的研究」(科学研究費補助金(基盤研究(A)(2)課題番号 14201003)の研究成果とその人的、物的成果を引き継ぎ、これをさらに進歩発展させることを目指したものであった。

つまり上記前田科研の成果は『中世インドの学際的研究』(財団法人東方研究会、2005年)研究報告書として公にされ、その成果は、世界有数の東洋学研究所のメッカハーバード大学の北燕図書館から購入の依頼があったほどの目覚ましい成果を上げた。今回のプロジェクトは前田科研の研究メンバーの多くが引き続き従事し、同研究の精神や方法論、さらには研究の継続性を維持しつつ、新たな展開を試みる事が可能であった、という意味できわめて好条件下でプロジェクト発進が可能であった。特に、研究母体である財団法人東方研究会は、インド哲学・思想の世界的権威であった中村元博士(東京大学名誉教授・日本学士院会員)(1912-1999)が日本の東洋思想研究、特にインド思想研究の拠点とすべく私財を投じて設立運営してこられて日本有数のインド哲学・思想の研究所であり、小なりといえども多くの志ある研究員を擁しており、日本におけるインド思想・宗教研究のメッカといっても過言でない研究環境をフル活用できる状態にあった。そのような人的・組織的な利点に加え、中村・前田の両理事長により研究成果の公開が積極的になされてきた伝統も研究の遂行並びにその一般社会への公開に関して、すぐれた環境が用意されていた。また、前田科研の研究環境の整備の一環として、中国国立社会科学院や韓国国立ソウル大学、オーストリアのウイン大学など海外の一流研究機関の協力も期待できた。

2. 研究の目的

本プロジェクトは、小さな組織とはいえインド思想・東洋思想の研究機関としての豊かな実績を有する財団法人東方研究会の研究員の力を結集し、個々の学術研究の着実な遂行はもとより、彼らの力を今日的な国際情勢および社会的ニーズを視野に収めながら個別研究を有機的に結集させること、つまり単に研究のための研究にとどまるのではなく、社会貢献を目指した基礎的かつ総合的な研究を行うことを、第一の目標とした。その方向性に沿って、今回は「インド宗教思想の多

元的共存と寛容思想の解明」という研究テーマを掲げることになった。

急激なグローバル化によって伝統的文化・思想は大きな変革に迫られ、価値観の混乱と行き詰まりが深刻となる一方、9.11事件に象徴されるように、異なる宗教・民族間の対立が激化し、痛ましい紛争・テロリズムが世界各地で頻発している。改めて諸宗教・民族等々の平和的共存の思想、とりわけ、そのひとつの基礎となるべき寛容思想のあり方を、大きく問い直す必要があると思われる。そのような共通認識に立脚して、本研究プロジェクトが企画されるに至った。

しかし、現実問題として寛容思想の研究は端緒に就いたばかりであり、従来、前提とされてきた「寛容」の概念は、西洋近代の価値観に大きく彩られ、キリスト教(特にプロテスタント派)的発想が暗黙理にその基礎をなしていたことは否めない。しかし、もっぱら西洋発の概念を尺度として、東洋思想の諸相、多様性を含み込んだアジア的伝統思想を理解し、評価し尽くそうとすることは、西洋中心主義のそしりを免れないばかりでなく、例えば異質要素を内部に取り込むことで内的ダイナミズムを絶えず更新しようとするインドの伝統思想が持ちうる今日的な意義と未来的可能性を見のがしてしまう可能性が大きいだろう。まさのこのような問題意識に立脚して、本プロジェクトでは、西洋近代の批判精神との対話を行いつつ、アジア的伝統の内側から視点意識的に掘り起こすことを目指して、インドを中心にアジア的な寛容思想の探求を、さまざまな専門領域の研究員がチームを組んで遂行することになった。

アジアの研究員と欧米の研究員の両者を招いて研究会を催したのも、そのような狙いがあったからである。またプロジェクトの後半からは、その成果を国際会議や海外の大学などでも積極的に発表し、それぞれ一定の評価を得ることができたと考えている。またその成果の発表は、本プロジェクト終了後も積極的に続けられていることを付言する。

本プロジェクトは、小さな組織とは言え長いインド思想・東洋思想の研究機関としての実績と豊かな研究員を有する財団法人東方研究会の研究員の力を結集し、個々の研究員の研究の遂行はもとより、彼らの力を社会的ニーズに合った研究に結集させること、つまり単に研究のための研究ではなく、社会貢献を目指した基礎的かつ総合的な研究を行うことを、第一の目標とした。その目的意識のもとに、今回のテーマであるインド宗教思想

の多元的共存と寛容思想の鶏鳴」というテーマは選ばれた。本テーマは急激なグローバル化によってもたらされた価値的混乱、さらに9.11事件以来異なる宗教・民族など異質な集団間の紛争が世界各地で頻発し改めて諸宗教・民族等々の平和的共存の思想、その基礎となる寛容思想の重要性が強く意識されるような国際社会の共通認識が生まれていた。しかし、現実問題として寛容思想は、研究の端緒に就いたばかりであり、その多くは西洋近代の研究が主流であった。しかし、真に普遍的な寛容思想の構築には、西洋近代という限られた領域の思想の研究から導きだされた思想を基礎とするだけでは、十分ではなく、広くアジア的な伝統によっても吟味され、また深く考察される必要があった。そうすることで寛容思想は、より普遍的で人類共通の目標に近づくこととなる。そのような社会的なニーズもあり、本プロジェクトでは、インドを中心にアジア的な寛容思想の探求と其れを加味したより普遍的な寛容思想の確立のための基礎作業の遂行、さらには方向性の明確化を目指した。さらに、その成果を広く社会に提供し、国際社会における寛容思想の形成、さらには国際平和理論の構築の一助となることを目指した。そのために、プロジェクトの後半からは、その成果を国際会議や海外の大学などでも積極的に発表し、一定の評価を得た。またその成果の発表は、本プロジェクト終了後も説教的に続けられている。

3. 研究の方法

研究方法は、前回の前田科研の方針を踏まえつつ、各研究者の専門的研究活動・現地調査の有機的連携を促進するために、全体を四つの研究班に分割し、その四つの研究班の成果が、そのまま第1編～第4編という形で報告書に反映する形となっている。すなわち、1. インド哲学・文学における多元的共存と寛容を解明する班、2. インド諸宗教における多元的共存と寛容を解明する班、3. 仏教における多元的共存と寛容を解明する班、および4. アジア諸地域における多元的共存と寛容を解明する班、がそれである。そしてその研究班を軸としながら、合同研究会や個別研究会を精力的に展開した。

また「寛容」という概念の洗い直しを行う上で、一つにはヨーロッパ世界において寛容思想はどのように展開してきたのか、もう一つは、インドにおける寛容思想の展開はどのような特徴を持っているのか、東アジアにおいてはどうか、という問題を問い直す必要から、国内（京都大学）、韓国（ソウル大学人文学部）・中国（社会科学院）、ヨーロッパ（ウィーン大学科学アカデミー）から著名な研究者を招聘して、全体研究会（一つは公開講演

会）を行い、国内外の学術交流ネットワークの促進を図った。

とりわけインドの宗教・哲学思想において、多様相・差別相を、一元的にまとめ説明付け、相互対立を解消しながら共存を図ろうとする一元論的傾向ないし習合思想的特質が顕著であると言われているが、それはおよそ「寛容」とは無縁な、自己中心的「包括主義」にすぎないとドイツのインド学者 P. Hacker は手厳しい批判を投げかけた。一方、稀有のインド哲学研究者であった W. Halbfass は、その Hacker の鋭い批判を冷静にうけとめつつ、ヨーロッパ中心主義を脱却しようと複眼的な視点にたつて、インドの包括主義と寛容思想を見直そうとした。この二人の研究成果は、本プロジェクト・メンバーが共有すべき重要な基礎をなすはずであると考えて、関係重要論文は和訳することにした。なお著名な研究者を招いての研究会・講演会および重要論文の和訳作業の成果は、報告書第4編、第5編、第6編に含まれている。

関係テキストを厳密に解読する文献研究、およびそれを踏まえて思想研究が本プロジェクトの中核部を形成しているが、その一方では現地調査研究を積極的に行い、アジア諸地域における現状をまのあたりにし、客観的に分析する方法を大いに重視したが、そのひとつの背景としては、本研究対象となっている「寛容思想」と「共存」は、単に研究者が一人で文字資料に接するだけでは汲みつくすことのできない、生きた思想に対する実存的コミットメントが不可欠であると考えたからである。そのような意味から、映像資料の収集にも精力を注いだことを最後に強調しておきたい。

4. 研究成果

本プロジェクトの主要な研究成果を収めた研究報告書は、邦文論文15本、欧文3本、翻訳2本から成り、500ページを超えるきわめて充実した内容としてまとめることができたことは望外の喜びである。

以下に、収載した各論文のタイトルを列挙しておく。

丸井浩、宗教の多元的共存の場に展開するインドの哲学的思惟の特質をさぐる。有賀弘紀、ヨーガ学派の思想と他思想—実修のヨーガと言語観を通して。日野紹運、インド宗教思想における寛容思想の淵源—ブラフマン。水野善文、インド中世文学にみる寛容性—ムレッチャをめぐって。山下博司、聖ラマーリングガルの包摂主義的理念とインド近代。保坂俊司、シク教における寛容思想の基礎的研究を中心として。佐々木一憲、宗教多元主義 (religious pluralism) における西欧的宗教観の潜在—インドの宗教多元的共存社会の背景思想に照らして。保坂 俊司 インド仏

教における寛容思想とその展開。武田浩学、忍 kṣānti と空 śūnya をめぐって。釈悟震、スリランカにおける仏教とキリスト教の歴史的対論―「パーナドゥラー論争」の意義。釈悟震、スリランカ仏教における諸宗教の共存と寛容―フィールドワークを中心として。佐久間留理子、仏教タントリズムにおける他宗教観と造形表現―諸天生成観自在を中心として。森和也、伴林光平の転向―仏教の社会的機能に関する幕末期の言説について。金鍾瑞、現代宗教多元主義と韓国的意味―インドの根源と関連して。奈良修一、東南アジアにおける、多元的共存と寛容思想―ジャワにおける多元的共存。

MARUI Hiroshi, Philosophy or religion? Reasoning and argumentation as a bridge over inter-religious conflicts: By way of an invitation to the following presentations on Indian philosophy.

Vincent ELTSCHINGER, Apocalypticism, Heresy and Philosophy - Towards a Sociohistorically Grounded Account of Sixth Century Indian Philosophy.

SATO Kojū, On Dendron Peridexion (δένδρον περιδέξιον): A Cultural Exchange between India and Greek.

以上の論文に加えて、P. ハッカー並びに W. ハルプファスの関係論文ないし研究書の一部の翻訳が掲載されている。前者は北田信氏、後者は服部育郎氏が担当した。

このように、本プロジェクトの成果はさまざまな領域に及び、研究方法も単一ではなく、量的にも膨大なものになっており、その成果の具体的内容の詳細については、500頁を超える研究報告書に譲るほかはないが、本プロジェクトの基本概念をなす「寛容」思想に関して確認できた点、あるいは新たな展望を得ることができた点については、若干の成果報告をまとめておく。

「寛容」とは、日本語においては翻訳語として近代以降主に用いられるようになった言葉である。重要な言葉であるにもかかわらず、その概念規定が必ずしも一定していなかった。またその原語である tolerance に関しては、宗教改革の混乱の中で大きな概念的転換を見るに至り、その後のキリスト教内宗派対立の緩和・解消へのプロセスを経て、世俗的世界に限定された徳目としての tolerance の今日的用法が定着した、という西洋世界における概念史の展望を十分に踏まえておかなければならないこと、そして何よりもそのような欧米的世界の歴史的展開に彩られた「寛容」概念の特殊性に対して、アジア世界の伝統思想から読み取りうる類似概念がどのような関係にあるのか、という比較思想的視点の確立が必須である、という共通認識を得ることができた。

この点を明らかにすることでハッカーやハルバースが提示したインド宗教思想界における寛容思想と包摂思想との議論に対して、最基層の部分からの提言が可能となった。この点は、西欧のインド学者すらもほとんど考慮してこなかったである。このように基本用語の概念規定を行ったうえで、本研究プロジェクトでは、前述のように4つの領域からそれぞれにアプローチを行った。

本プロジェクトのテーマは、グローバル化が進む国際委社会において今後ますます重要なものとなることは、明らかであり。その意味で、西洋近代とは異なる寛容思想の可能性、つまりアジア的、なかんずく日本的な寛容思想を世界に提言できる研究の道筋を開けたことは、インド思想における寛容思想の研究同様に、本プロジェクトの大きな成果であると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 30 件)

- ①釈悟震、日本の大学におけるインド学仏教学の動向―インド学仏教学の多元的共存の思想を求めて、宗教と文化(韓国ソウル大学)、査読有、17号、2009、1-32
- ②釈悟震、パーナドゥラー論争の再考(スリランカにおける仏教とキリスト教の歴史的対論)、仏教評論(韓国ソウル)、査読有、38号、2009、149-173
- ③保坂俊司、インド宗教における「宗教と論理」の関係性の考察、宗教研究、査読有、83巻、2009、311-337
- ④山下博司、シンガポールの国民統合と宗教間対話、宗教研究、査読無、83巻、2010、420-421
- ⑤山下博司、シンガポールの宗教政策と民族融和―宗教間関係と〈宗教協和宣言〉の成立を中心に、東方、査読有、25号、2010、178-198
- ⑥佐々木一憲、ラフカディオ・ハーンの〈総合仏教〉と〈近代仏教学〉、パリア学仏教文化学、査読有、23号、2009、115-135
- ⑦森和也、排仏論の根拠としての海外情報―平田篤胤の事例を中心に、宗教研究、査読無、83巻、2010、449-459
- ⑧佐藤宏宗、聖樹ペリデクシオン―古典に見られるインドとギリシアとの思想交流の多元性、東方、査読有、25号、2010、90-117
- ⑨巨野紹運、The Beginning of Bhakti's Influence on Advaita Doctrine: The Teaching of Madhusudhana Sarasvati、Indian Philosophy and Text Science、査読有、2009、101-113
- ⑩釈悟震、スリランカにおける仏教とキリス

ト教の歴史的対論、宗教研究、査読有、357号、2008、301-324

⑪ 山下博司、The Absolute as Luminosity: The ideal and movement of Saint Ramalingar, Journal of Indian and Buddhist Studies、査読有、27号、2008、1165-1171

⑫ 保坂俊司、寛容思想の比較宗教学的考察、宗教研究、査読無、359号、2009、415-416

⑬ 佐久間留理子、ネパールの仏教寺院ブンガ・バハの宗教的空間にみられる表象、宗教研究、査読無、359号、2009、496-497

⑭ 丸井浩、On the authorship of the Nyayakalika again、印度学仏教学研究、査読有、56巻、2008、1063-1071

⑮ 丸井浩、インド思想と「罪」の概念 — 四天王寺国際仏教大学平成18年度夏学期「仏教I」(瞑想)講話録をもとに、四天王寺国際仏教大学紀要、査読有、45号、2008、543-564

⑯ 保坂俊司、禅とイスラーム神秘主義思想における共通性について、比較思想、査読無、33号、2007、59-67

⑰ 森和也、近代仏教の自画像としての護法論、宗教研究、査読有、81巻、2007、201-226

⑱ 丸井浩、Nyāyamañjarī に登場する「六タルカ (*sattarka*)」の意味 — ジャヤンタは「六派哲学」を知っていたか? —、インド論理学研究 (駒澤大学) 第1号 (印刷中)、寄稿依頼論文

[学会発表] (計15件)

① 佐々木一憲、Śikṣāsamuccaya の説く凡夫の発心 — 宝雲經の引用の解釈を巡って、日本印度学仏教学会第60回大会、2009年9月8日、大谷大学(京都府)

② 奈良修一、オランダ東インド会社の商館ネットワーク、比較文明学会、2009年11月29日、立教大学(東京都)

③ 佐久間留理子、Motifs of miniatures on illuminated manuscripts of the Kāraṇḍavyūha-sūtra and its cultural background、第14回国際サンスクリット学会、2009年9月3日、京都大学(京都府)

④ 丸井浩、Reasoning and argumentation as a bridge over inter-religious conflicts、第22回世界哲学会議、2008年7月30日、国立ソウル大学(大韓民国ソウル市)

⑤ 保坂俊司、寛容思想の比較宗教学的考察、第67回日本宗教学会、2008年9月15日、筑波大学(つくば市)

⑥ 佐久間留理子、ネパールの仏教寺院ブンガ・バハの宗教的空間にみられる表象、第67回日本宗教学会、2008年9月15日、筑波大学(つくば市)

⑦ 丸井浩、The meaning of a diversity of established world views or tenets (*śid-*

dhānta) in debate: What does Jayanta's explanation of NS 1.1.26-31 tell us?

Read on April 28, 2009 in the International Conference: World view and the ory in Indian philosophy, Barcelona.

⑧ 丸井浩、Examination of the meaning of 'prāmāṇya' with special reference to its use for the Veda or 'verbal testimony' (*śabda*) in the Codanāsutra-adhikaraṇa of Ślokavārttika and some Nyāya texts. Read on September 2, 2009 at the 14th World Sanskrit Conference, Kyoto University.

[図書] (計13件)

① 釈悟震、山喜房仏書林、キリスト教か仏教か — 歴史の証言(重版)、2009、220

② 保坂俊司、北樹出版、癒しと鎮めと日本の宗教、2009、209

③ 山下博司、東洋書林、ビジュアル版 カーマストラの世界(翻訳書)、2009、297

④ 山下博司、東京堂出版、アジアのハリウッド — グローバリゼーションとインド映画 — (共著)、2010、1-226

⑤ 山下博司、講談社、ヨーガの思想、2009、246

⑥ 保坂俊司、青春出版社、世界の宗教問題の基本(編著)、2008、219

⑦ 山下博司、東京堂出版、インドを知る事典(共著)、2007、1-211

⑧ 保坂俊司、青春出版社、世界の宗教問題の基本(編著)、2007、219

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

釈 悟震 (SHAKU GOSHIN)

財団法人東方研究会・研究員
研究者番号：80270536

(2)研究分担者

有賀 弘紀 (ARUGA KOKI)
財団法人東方研究会・研究員
研究者番号：50290995
佐久間 留理子 (SAKUMA RURIKO)
財団法人東方研究会・研究員
研究者番号：60280658
佐々木 一憲 (SASAKI KAZUNORII)
財団法人東方研究会・研究員
研究者番号：80508515
佐藤 宏宗 (SATO KOJU)
財団法人東方研究会・研究員
研究者番号：60300795
奈良 修一 (NARA SHUICHI)
財団法人東方研究会・研究員
研究者番号：00260125
森 和也 (MORI KAZUYA)
財団法人東方研究会・研究員
研究者番号：60277788
小野 基 (ONO MOTOI)
筑波大学大学院・人文社会科学研究科・
准教授
研究者番号：00272120
(H20→21：連携研究者)
武田 浩学 (TAKEDA KOGAKU)
財団法人東方研究会・研究員
研究者番号：70390763
(H20→21：連携研究者)
丸井 浩 (MARUI HIROSHI)
東京大学大学院・人文社会系研究科・教
授
研究者番号：30229603
(H20→21：連携研究者)
水野 善文 (MIZUNO YOSHIBUMI)
東京外国語大学・南・西アジア課程・
教授
研究者番号：80200020
(H20→21：連携研究者)
山下 博司 (YAMASITA HIROSHI)
東北大学大学院・国際文化研究科・教授
研究者番号：20230427
(H20→21：連携研究者)
日野 紹運 (HINO SHOUN)
岐阜薬科大学・教授
研究者番号：60165123
(H20→21：連携研究者)
保坂 俊司 (HOSAKA SHUNJI)
中央大学・総合政策学部・教授
研究者番号：80245274
(H20→21：連携研究者)

(3)研究協力者

北田 信 (KITADA MAKOTO)

財団法人 東方研究会・研究員
研究者番号 60508513
谷口 昌彦 (TANIGUCHI MASAHIKO)
財団法人 東方研究会・研究員
研究者番号 40462262
田辺 和子 (TANABE KAZUKO)
財団法人 東方研究会・研究員
研究者番号 20217102
杉岡 信行 (SUGIOKA NOBUYUKI)
財団法人 東方研究会・研究員
研究者番号 80250033
服部 育郎 (HATTORI IKURO)
財団法人 東方研究会・研究員
研究者番号 40250039